



島根大学医学部内科学講座
内科学第一教授

金崎 啓造 先生

Calm
Approach to Glycemic Variations

対談

第21回

糖尿病性腎症をめぐる最近の話題

岡田 糖尿病治療において腎症予防は重要な課題の一つです。高血糖状態が長期間持続すると細小血管を障害し、腎臓にも障害が及ぶこととなります。そのため、糖尿病にかかわる医療者は高血糖を是正することで腎症を抑制しようと努めてきました。ところが近年では新しい薬剤の登場やエビデンスの蓄積

によって腎障害に対する対応にも変化が生じてきていると思います。そこで今回は腎のエキスパートである島根大学の金崎啓造教授から、腎のトピックスにまつわる最新の知見と解説をいただきたいと思います。最初に“DKD”の最近の概念をご説明いただきたいと思います。

産業医科大学病院
臨床研究推進センター
センター長・診療教授

岡田 洋右 先生



従来の糖尿病性腎症を包含する新たな概念

金崎 これまでの糖尿病症例における腎臓合併症は慢性高血糖に伴う血行動態依存的あるいは非依存的機序によって腎が障害され、アルブミン尿が顕著で、糸球体過剰濾過をきたす人が多かったと考えられます。ところが現在は慢性高血糖に対する多因子介入によって血行動態依存的・非依存的な機序による腎障害は抑制されてきています。一方で、高齢化、病歴の長期化、肥満、一部の薬剤の長期投与が腎に影響することがわかってきました。つまり古典的なリスクは管理できるようになったものの、糖尿病状態に関連する新たな因子で腎障害を引き起こす人が増加しているということです。

糖尿病症例における腎障害を表す英語には、Diabetic Nephropathy, Diabetic Kidney Disease, CKD with Diabetes などがあります。しかし、KDIGO 2022 では本質的に糖尿病の病態に直接関連するという“誤解”を生むとして Diabetic Kidney Disease という言葉を使っていません。また、明確な定義はないという理由で Diabetic nephropathy も使われなくなり、糖尿病症例における腎臓合併症はすべて「Diabetes and CKD」と書かれるようになりました。ただし、糖尿病に介入しなければ確実に糖尿病性腎症を引き起こすので、糖尿病性腎症という糖尿病症例特異的に生じる疾病名を否定するのは間違っていると思います。

これまで日本腎臓学会は Diabetic Nephropathy を糖尿病性腎症、Diabetic Kidney Disease を糖

会員限定コンテンツのため、med パス会員にご登録、
またはログインが必要になります。

